2025年8月13日　水曜祈り会　　吉田真司

本日の学び　　テーマ:「神が求められること」　テキスト:申命記10章12-22節

【理解の手がかりとして】

本課のテキストは冒頭、「イスラエルよ。今、主があなたに求めておられることは何か」（10:12）という問いで始まる。それに対する答えは明白。「ただ、あなたの神、主を畏れてそのすべての道に従って歩み、主を愛し、心を尽くし、魂を尽くしてあなたの神、主に仕え、わたしが今日あなたに命じる主の戒めと掟を守って、あなたが幸いを得ること」（10:13）である。

終わりに「あなたが幸いを得ること」とあり、人が人として幸いなる（祝福された）人生を辿るためには、「主を畏れ」「主の道に従い」「主を愛し」「主に仕え」「主の言葉を守る」ことであると示される。

続くのは、その神は天地万物の所有者であられるということ（14 節）。そしてその大いなる主が、先祖を愛して、さらにあなたがたを選ばれた、と告げる（15 節）。

そしてそのことを前提として、神の民としての行動への促し（命令）が二つ。①心の包皮を切り捨てよ（16 節）、②寄留者を愛しなさい（19 節）、である。これらについて考察する前に、それを命じられる主の性質・行動を見ておこう。

- 主は神々の中の神、主なる者の中の主、偉大にして勇ましく畏るべき神（17 節）
- 人を偏り見ず、賄賂を取ることをせず、孤児と寡婦の権利を守り、寄留者を愛して食物と衣服を与えられる（17-18 節）
- 大いなる恐るべきことをあなたがたのために行われた方（21 節）
- あなたを天の星のように数多くされた（22 節）

その主が命じられる。①心の包皮を切り捨てよ、②寄留者を愛しなさい、と。

①　「心の包皮を切り捨てよ」

旧約聖書の他の部分にも認められる教え。一例としては「ユダの人、エルサレムに住む人々よ、割礼を受けて主のものとなり、あなたたちの心の包皮を取り去れ」（エレミヤ 4:4）がある。

またパウロはローマ書でこれを展開している。「外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、また、肉に施された外見上の割礼が割礼ではありません。内面がユダヤ人である者こそユダヤ人であり、文字ではなく“霊”によって心に施された割礼こそ割礼なのです。その誉れは人からではなく、神から来るのです」（ローマ 2:28-29）。　※「割礼」とは、陰茎の包皮を切開、もしくは一部を切り取る外科的手術。神がアブラハムに命じられた時に始まるとされる（創世記 17 章）。後代では、捕囚の地でイスラエル人は割礼を選民の記号として重視するようになった。

割礼は、「聖別」された存在を意味し、「（主への）献身の誓い」を象徴しており、神との契約関係（神の言葉への忠誠）に入る初めの儀式である。加えて、割礼は「清め」の意味合いを持ち、「心の割礼」という表象には、その意味が込められている。

「心の包皮を切り捨てよ」とは、形骸化した信仰を改め、心の底から新たにされて（清められて）、神との契約関係（忠誠）を生きよ、ということである。それは「二度とかたくなになってはならない」（16 節）とあるように、これまで絶え間なく主への反逆を繰り返した民に対する主の要求である。

② 寄留者を愛しなさい

寄留者への愛は、心の割礼の当然の結果として受け止めさせられる。これについては、この箇所では多くは語られていないが、神と関わりを持って生きる生活は、その神のご性質（人を偏り見ず、賄賂を取ることをせず、孤児と寡婦の権利を守り、寄留者を愛して食物と衣服を与えられる）に倣って（創り変えられて）生きることであり、心が主に向かって清められ（心の包皮が切り捨てられ）た者は、他者に対しても心が開かれるのだ、というのである。

主を愛し、寄留者を愛すること、これらが不可避の関係であるということは、主イエスの示された最も重要な二つの掟と相通じるものである。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」「隣人を自分のように愛しなさい」（マタイ 22:37、39）である。

『明日に生きる寄留の民』（李仁夏著）から紹介する。「旧約聖書は『人は神の像で創造された』と説く。どんな人間も、神との関係の中でかけがえのない存在としてうけとめられる。・・・旧約のストーリーの一番大切な出来事は、出エジプトである。奴隷の地エジプトに生きていたヘブル人たちの叫びを聞き、モーセを送り、その抑圧からの解放を果たす神の働き、・・・イスラエルはその出来事を神との契約の原点に据え、その歴史を歩む。イスラエルの召命は自らの解放だけでなく、その祝福がかれらによって、全ての民に及ぶ質を本来もっていた。ところがその後カナンの地に定着し、イスラエルの国家を形成した。やがて周辺の大国との関係の中で亡国のうき目に会ったりしているうちに、神との契約の質を律法という形式に転化させ、ユダヤ主義に転落した。この方向はイスラエルの選民意識を自己中心に据えることによって、そうでない異教の社会との間に越えることのできない隔ての中垣をつくり出してしまった。・・・この越えることのできない、敵意すら生きている現実にイエスはキリストとして立たれた。それ故にその時代の傷をイエスは負うて、十字架にかかられた。・・・『キリストはわたしたちの平和であって、二つのものを一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き、・・・敵意を十字架にむけて滅ぼしてしまったのである』。」

神の祝福を独占すべく分断するのではなく、神の祝福を分かち合う世界へ、自らの信仰が他者への祝福（他者の喜び）につながるように願うばかりである。

（聖書教育より）

「この世では、すべての人間の存在が流浪の民であり、旅人なのではないでしょうか？」（大人クラス）
「寄留者として互いに助け合う生き方へと促されています」（聖書の学び～寄留者として）